

随想

仕事のやりがいとは…『やりがい搾取の農業論』を読んで

（株）P P Q C 研究所 加藤 宏光

『やりがい搾取の農業論』というタイトルに引かれて通信販売でこの本を買ったもののパラパラ捲って、何だか読む気がしなかつたため、半年以上は放置していた。しかし、あるきっかけで改めて手を取り直した。

随分前になるが、『一本五〇〇〇円のレンコンがバカ売れする理由』という本で知ったこの著者、野口憲一氏（注1）の農業論には、改めて気付かされる歴史を元にした解説で、頷けることが多い。全体を俯瞰するために、ざっと目次を紹介する。

第一章 構造化された「豊作貧乏」

第二章 農業からの搾取の上に成り立つ有機農業

第三章 植物農業も「農業」である

第四章 日本人の仕事観が

「やりがい搾取」を生む
第五章 ロマネコンティに「美味しさ」は必要ない
第六章 金にならないものこそ金にせよ

この書物が著者の目を引いたのは「昨近の日本人の仕事に対する姿勢」に、戦中生まれの子にとつて、大いに違和感を与えるものがあつたのだろう。著者が社会に出た頃は、わが国の高度成長期真っ只中で「おお、猛烈」等「それ行けドンドン」の気風が社会を席巻していた。また、それに吞まれることに抵抗も違和感もない若者ばかりで「猛烈に働くことが明日を良くする」と頭から信じていた（そうでもない若者もいるにはいたが）。そんな空気がいつの間にか変わったのは、バブルが崩壊し、それにも関わらず何とな

くわが国がまだ豊かである、と思わせる雰囲気の中で、若者が「自分探し」等と訳も分からないうい言いつをしながら「3K（注2）」業界を避ける傾向が強くなったところからである。わが業界等はその典型的な例で、極端な人手不足から一足飛びに機械化が進んだ。給料は安くても楽で休める仕事に若者が集まる現象が顕著であつた。本来は、3Kの仕事には高い報酬があるべきではあるものの、現実には報酬が低いケースが多いのであるから、若者がそつぽを向いても仕方ないのではあるが。こうした雇用環境は高能力の労働者を引き付けられないのもかく、現在の農業基盤をつくつた「農地改革」が再軍備と防共機能を担つた、という野口氏の見解は、著者に

新しい目を開かせてくれた。農業人でありながら社会学を学び博士号を得ている氏の見方は、無下に無視できない。
農産物の品質は生産者の努力と研究の賜物であるが、それが価格に反映されないなら、努力をしない傾向が強まる。この結果、農協傘下の生産者が思想傾向として共産主義的になる、というのである（著者には野口氏の主張のように単純化した解釈が当たっているとは思ひ切れないのではあるが）。
この本が主張することは「農産物生産者は、その規模が概して小さくまた価格に付加価値を付けられない農協傘下では、生産意欲が削がれる」結果として、経営のやりがいを奪われているのが、現状である。これを打破するためには、価格設定を自分で

できる「付加価値創造」をなさねばならない、ということである。ストーリーの端々には異論があるものの、売りを人任せでは生きがいは繋がらないという主張には全く同感である。日本には土農工商という身分差があつた（とされている（注3））。商人の身分が最も低いのは、金を不浄のものとする意識があり、年貢を支える農業や製造を担う職人（技）を高く評価する風潮が長かつた。この影響を残すのか、製造の分野に比較すると販売（営業）を軽視する傾向はいまだに感じることが多い。

作ることにプライドを持っていた生産者領域を改めて見てみると、著者の青年期から壮年期にわたる一九七〇～八〇年代には社会の隅々まで行き渡つていた、活気が薄れている。とくに生産に携わっている人々に、仕事の意義を日常実感しながら働いているヒトが少ないことを実感する。

「国力の低下はこんなところにも顕われているのか…?!」と実感することが多い。
九月に、実務に携わるスタッフ全体に、採卵養鶏の概要と鶏

病が与える被害の概説をプレゼンテーションした。新型コロナ騒動が明けての久しぶりの顔合わせで、新しいスタッフにと顔を合わせて親しく語り合つた。それから二か月ほど経つた、過日（十一月初めのころ）、定期巡回に訪れた育成農場のことである。

九月に知り合つた、ワクチネーション担当の女性社員二名に声をかけられた。

女性1 『ちょっといいですか？』

著者 『どうぞ？』

女性1 『このケージに分けて飼っている鶏の脚は治りますか？』

見ると、いわゆる開脚で、ローシストと呼ばれるもの、もしくはREOウイルス感染の後遺症と思われる。
著者 『これは、治りませんね。淘汰しかありませんね』

女性1 『やつぱり…可哀そうで、何とか治れば、と思つて飼つてますが…』

著者 『残念ですが、淘汰するしかないですね』
女性1 『この子の眼を診てください』

著者 『結膜炎ですな、アデノウイルス性かもしれないですね。アデノウイルスというのは、人間のプール熱の原因のようなものです』

女性2 『深刻ですか？』

その雛はいかにも遅れつてこ

である。
著者 『結膜炎は問題ないので、発育の遅れが極端なので、あまり産まないかも…やはり淘汰かな』

女性1 『やはりそうですか！ダメかなとは思つても、可哀そうなので、飼つてます』

女性2 『この子の羽根は正常ですか？毛艶が悪いように思いますが？』

著者 『少し毛艶が悪いのは、発育が遅れていて、競争に負けているからでしょう。でも、肉付きはまずまずですから、飼つておいては？』

女性2 『そうします。いま、ILTとFPのワクチンをやっているのですが、効果が分らないです…』

著者 『ILTについては効果が目に見えにくいですね！昔のワクチンでは、特徴的な結膜炎があつたのですが、今はあまり気づか

れません。FPワクチンの効果は、穿刺後五日目位に穿刺後に小さなコブができますから、確認してください』

このような会話の間、女性スタッフ二人はいかにも労しそう（いたわしそう）に遅れつた子を胸に抱いて、背中を撫でている。

仕事に慣れ過ぎて、生き物を生き物と感じなくなっている従業員（著者を含めて）の中で、鶏を生き物として慈しむ女性たちに、かつての著者の思いを垣間見て、ホットした次第である。

注1…一九八一年生まれ、（株）野口農園取締役、日本大学文学部非常勤講師、社会学博士、農業のあり方を独特の切り口で解説している。実践的な研究姿勢が特徴的。
注2…キツイ、汚い、臭いの三つのKを伴う業務を伴う業界。
注3…最近では、この身分の差がかつて言われていた程に確たるものではなかつた、という証拠が挙がっている。わが国のシステムはそれほど固定的ではなく、能力主義であつたことが明らかにされている。